

# 赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

# NEWS

1

JANUARY 2026  
#1028

赤十字NEWS  
WEB版はコチラ



C  
O  
N  
T  
E  
N  
T  
S

## 特集

### 誰かの役に立ちたい 娘の願いを叶える献血

..... P. 2

## TOPICS

〈新年のご挨拶〉

いのちと尊厳を守り続け、未来へ  
～150周年へ歩む一年に～ ..... P. 4

青少年赤十字の国際交流  
「小さな一歩が、世界を動かす」 ..... P. 5

## 連載

海外派遣の現場から インドネシア編 ..... P. 4

けんけつのいま ..... P. 5

## AREA NEWS

〔岩手〕 若いボランティアたちの  
宿泊研修「赤十字防災キャンプ」  
〔東京〕 能登半島地震から2年  
故郷を離れて学業に励む  
「若き翼たち」の献血会 / 他 ..... P. 6

## WORLD NEWS

トルコ・シリア地震  
再生の道を一歩ずつ。新「献血ルーム」も完成 ..... P. 8

## Present!

ゆで太郎特撰 水出しそば茶  
(5袋入り×8パック)

プレゼント!  
10名様



詳しくはP.7をCheck! ▶

# Q

## 献血を支えているのは？

a



b



### a 自分の血液で誰かを助けたい人

### b (献血できなくても…) 献血に関心がある人

# A

答え **a・b**両方とも

血液製剤を必要とする方を支えているのは、献血協力の有無に関わらず献血へのご理解・関心をいただいている全ての方です！以下の基準などによってご協力が叶わない方でも日常の範囲で啓発やお声がけいただいていることから大切な協力者です。

#### 献血基準

(年齢・体重・血圧など)



#### 当日の体調

当日の問診・体調などを勘案し、  
献血会場の健診医師が総合的に  
判断して献血をお控えいただく場  
合もあります。

#### 服薬・歯科治療・ 既往歴など

献血可否判断の参考となる  
チャットボットは、下記の  
二次元コード↓をチェック！

#### 海外渡航

#### 予防接種

#### 献血をご遠慮 いただく 場合



※ご不明な点、その他詳細につきましては、最寄りの血液センターまでお問合せください。

血液は  
人工で造れず、  
長期保存も  
できません

「赤血球製剤」は  
採血後

**28日間**



「血小板製剤」は  
採血後

**6日間**



※要振とう

「血漿製剤」は  
採血後

**1年間**



※冷凍保管

継続的な献血協力が必要です

\*輸血用血液製剤の種類と  
使用期限について、  
詳しくはこちら ⇒



日本赤十字社  
Japanese Red Cross Society



日本赤十字社は  
2027年に150周年。

R100

古紙パルプ配合率100%  
再生紙を使用

VEGETABLE  
OIL INK

環境にやさしい植物油インキを  
使用しています

## 娘の願いを叶える献血



脳腫瘍と闘いながら懸命に治療を続け、2020年12月に18歳の若さで永眠した坂野春香さん。最期まで「人の心に何かを刻みたい」「人の役に立ちたい」と口にしていた春香さんの遺志を継ぐように、父・貴宏さん、母・和歌子さんは、彼女の闘病記や、漫画家になるのが夢だったという彼女が残した作品を通して、生きることの真の価値を伝え続けています。今回は、貴宏さんの「初めての献血」に密着するとともに、お二人に、生前の春香さんから託された“想い”についても伺いました。



2019年10月、再手術後の春香さん。手術前には、脳の部分切除で「もとの自分ではなくなる」ことを覚悟して、家族宛てに手紙を残していた

## ●闘病記「春の香り」より

- 11月17日(火): 今日もまた、不穏な状態が続いていました。(中略)再び横になりましたが、
- 「死にたい、どうしたらいい」と自問自答するか
- のように、小声でささやいていました。「死にたいと思ったら、死にたいと言っていよう」と提案してみると、春香は、「死にたい、死にたい」と繰り返して、涙を流しました。すると、ふと我に返ったように「生きたい」や「死にたくない」という言葉を吐くようになりました。(105ページ)
- 「死にたい」「生きたい」と揺れ動く心を抱えながら、生きる意味を模索し、人生を全力で生き抜こうとした春香さん。全てを記録してほしい、という春香さんの希望で貴宏さんが書き記した坂野家の闘病記は、ぜひ、書籍でお読みください。



2020年3月、家族で幾度となく訪れたフラワーパークで。この頃はコロナ禍で「ステイホーム」期間だったこともあり、春香さんの病状とも向き合いながら、家族4人で過ごす時間が多かった

意識しました」と和歌子さん。あるときは、春香さんの自殺行為を止めるために、深夜0時から早朝5時まで、自宅の階段上で、家族3人で懸命に押さえ続けたことも。貴宏さんは、その状況を、次のように話しました。

「朝方、春香が『トイレに行きたい』と言ったのですが、階段から転げ落ちてしまう危険もあり、どんな行動を起こすかわからないので、『今ここで春香の手を離すことはできない。するならここででもいい』と伝えました。そうしたら、階段でそのままお小水を…。今思い返しても、つらい体験です」



貴宏さんは、現役の高校教師。仕事をしながら、本の出版、映画化、講演活動など、春香さんが亡くなってからの5年間で、全力で走り抜けた



春香さんが亡くなる1カ月前に左手で描き上げた絵本「X(バツ)くん」。「X=間違いだって成功のもと。誰しもが必要な存在、自分らしく生きよう」というメッセージが。(発行:三恵社)

## I 脳腫瘍発症から7年2カ月

## 懸命に生きた春香さんと、支え続けた家族

坂野家の次女として生まれ、笑顔の絶えない家庭ですくすく育った春香さんの体に異変が起きたのは、小学6年生の秋のこと。悪性の脳腫瘍と診断され、緊急手術。腫瘍は切除され、抗がん剤治療によって一度は寛解したものの、17歳の時に再発し、再手術をした後は、右半身まひと失語症の障害を負いました。そんな中でも、得意な絵を諦めず、利き手ではない左手を使って、亡くなる直前まで作品を残し続けた春香さん。闘病する彼女のそばには、全身全霊で支える家族の姿がありました。特に、再発から約1年後に再再発し、精神症状を伴う発作を起こすようになってからは、片時も目の離せない状態に。看病のため仕事も退職し、春香さんに付きっきりだった和歌子さんは、そのときの様子をこう振り返ります。

「その頃の春香は、病気の影響で発作的に自殺しようとし、危険な行為を繰り返すようになっていました。キッチンで包丁を探す、ベランダから飛び降りようとする、抱きしめてなだめようとする」と頭を床に打ちつけ、手首に爪を立てて引っかく…。私たちは、春香に不穏なスイッチが入るとすぐ気づくようになっていたので、最悪の事態を未然に

防ぐことができましたが、主人も姉の京香も仕事や学校に出かけている日中は、『私が守らなければ』と、常に緊張と不安でいっぱいでした」

時には、「死にたい」「殺す」と大声で泣き叫び、暴れることもありました。

「12歳から闘病してきた春香ですが、手術のときも、苦しい抗がん剤治療の時も、『痛い』とか『つらい』という言葉は一度も聞いたことがありませんでした。きっと、暴れたり、大声で叫んだりすることで、今まで溜め込んできたものを外に出そうとしているのだと感じ、全てを受け止めようと決

## I 娘と同じように病気と闘う人のために…

## 貴宏さん、初めての献血

春香さんが亡くなった後、貴宏さんと和歌子さんは起き上がれない日々が続きました。少しずつ日常を取り戻す中でも、救急車のサイレンなどで記憶がよみがえり、悲しみは癒えることがありませんでした。しかし5カ月を過ぎる頃、和歌子さんは「春香との記憶が消えてしまう前に、できる限りのことを書き残そう」と思い立ちます。その原稿に、貴宏さんの闘病日記も合わせ、父母二人の視点でまとめられたのが『春の香り』です。本が出版されると、すぐに映画監督から直接打診を受け、映画化の話が動き出しました。また同時に、貴宏さんには、多くの講演依頼が舞い込みました。

「講演では、『学ぶ』『選択する』『食べる』『人の役に立つ』『自分らしくある』、この5つのキーワードで、春香の闘病から気づかせてもらった『生きること』の話をしています。春香は最初の入院生活で、同じ脳腫瘍や白血病と闘う子どもたちと共に、院内学級で学びました。闘病中であるにもかかわらず、何かを学んでいるときの子どもたちのキラキラした表情は忘れられません。また、再発して2度目の手術をする前に、腫瘍をどれだけ取り除くか、医師に選択を迫られました。私は正直、再再発

のリスクを負ってでも、大好きな絵が描ける身体機能は残したほうがいいのではと迷いましたが、春香に意志をたずねると、『取れるだけ取ってほしい。たとえ話せなくなっても、私は生きたい』と即答でした。短い人生でしたが、生きる意味を探し続けた春香の姿を伝えていくことは、誰かの役に立つことかもしれない、と思い、講演などの発信活動を行っています」

そんなふうにする貴宏さんは、今回、初めての献血に挑みました。

「白血病でご子息を亡くされた方のお話を聞く機会があり、そのときに、輸血用の血液が届くことを待ちわびて、血液が届くと『命が届いた!』と表現されていたのが、ずっと心に残っていました。春香も手術の際にたくさん輸血を受けていましたし、『いつか自分も献血を』と、献血アプリのダウンロードは済ませていたのですが、本の発行や映画化、講演活動などの多忙の日々で先延ばしになっていました。やっと念願が叶った思いです」と貴宏さん。和歌子さんも、「闘病中は春香を生かすことに必死で、手術のときに受けた輸血がどれだけの人が提供してくれたものなのか、これまで



春香さんの入院中は、同じように病気と闘う子どもたちに接することも多かった和歌子さん。『「この子たちが頑張っているんだから、私も頑張らなくちゃいけない」と、いつも自分を奮い立たせていました」



発作を起こし、何時間も「死にたい」と訴え続けた後、シュークリームを口にした途端、「おいしい。生きている価値が見出せた」と涙を流す春香さん。貴宏さんはこのとき「おいしいものを食べることは、生きることに大きな意味を与える」と、実感したという



2020年1月、姉・京香さん(左)と、春香さんの一番の理解者で親友、両親にとって最も頼れる存在であった京香さんだが、学業と春香さんの介助を両立していた過去を振り返り「私も苦しくて、逃げ出したかった」と涙ながらに語り、両親を驚かせた

考えが及びませんでした。輸血の記録を見ると最初の手術では赤血球製剤、血小板製剤、新鮮凍結血漿など、数種類の輸血を受けました。今回、これが1人2人ではなく何人の方が提供してくださった血液だと教えていただき、驚きました。たくさんの方が、あの手術で春香の命を助けてくださったのだと思うと、その重みを実感しています」と、献血への感謝の思いがいっそう膨らんだようです。春香さんの「人の役に立ちたい」という願いを胸に、お二人の「生きる」を伝える歩みは、これからも続きます。

## 春香さんの本の紹介



## 『春の香り』(発行:文芸社)

病気の発症から最期まで、春香さんの闘病の記録を父、母それぞれの視点で書きつづった一冊。貴宏さんの記録部分は、亡くなる約1カ月前まで春香さんと確認しながら作成した内容に、当時の日記を加筆した。表紙の絵は、春香さんの右手の指がわずかに動いていた時期に、右手と左手の指に絵の具をつけて描いたもの。2022年8月に発売、2025年3月には同名タイトルで映画化された。



- ① 400mL献血の受付を行う。機器に指をかざして生体(指静脈)の認証を行い、適正な採取量を算出するための体重測定などを済ませる
- ② 医師の問診を終え、献血が可能であるか事前検査を行う。指先から少量の血液を採取しヘモグロビン濃度と血液型を確認
- ③ いざ採血。看護師との会話に緊張も解け、笑顔を見せる貴宏さん

## いざ、献血ルームへ…

## 「こんなに気軽にできるんだ」

貴宏さんが訪れたのは、岐阜県赤十字血液センター内のあかなべ献血ルーム。受付時の問診票の記入を終えて、「事前の質問や確認項目が多く、安全な血液を届けるために、これだけ厳しくチェックしているのですね」と貴宏さん。学生時代から運動部で体を鍛え、学校ではハンドボール部の顧問をするなど、体力には自信がありましたが、「時折立ちくらみがあるので、赤血球やヘモグロビンが少ないのでは」と妻は心配していました。でも、事前検査では基準値を無事にクリア。実際にやってみたら、あっさりと献血が終わり、何の心配もありませんでした。こんなに気軽にできるなら、もっと早く献血すればよかった。これからも続けたいです」と語りました。

# T P I C S

新年のご挨拶

## いのちと尊厳を守り続け、未来へ150周年へ歩む一年に

**途絶えることのない自然災害や紛争。  
高まり続ける人道支援ニーズ**

新年あけましておめでとうございます。年頭に当たり、皆さまにとりまして今年が良い年となりますことを心からお祈り致します。また、日頃よりさまざまな形で日本赤十字社の活動をお支えくださっておりますことに、心より御礼申し上げます。

2025年もまた、私たちの「いのちと健康、尊厳を守る」力を何度も試された一年でした。日向灘地震やトカラ列島の群発地震、岩手県大船渡市の山林火災、そして夏の記録的豪雨や台風など、日本各地で災害は相次いでおり、被災されたすべての皆さまに心よりお見舞い申し上げます。日本赤十字社は発災直後から救護班やボランティアを派遣し、医療救護、避難所支援、こころのケアなどに全力を尽くしてまいりました。現場では、地域の皆さま、自治体やボランティアの方々との協力の輪も広がり、赤十字は苦しんでいる人を救う運動体であるのだということを改めて胸に刻む一年でもありました。

海外に目を向けますと、ガザやウクライナ、スーダンなどでの武力紛争はまだ終わりの見えない状況です。またパキスタンや台湾では豪雨、アフガニスタンでは地震といったように自然災害も絶えない年でした。こうした紛争や災害のために多くの人々が命の危険や

医療・生活の困難に直面しています。日本赤十字社は国際救援金の募集や国際要員の派遣などを通じ、世界各国の赤十字・赤新月社の仲間たちと共に、苦しむ人々に寄り添い続けました。



日本赤十字社社長 清家 篤

**■ 創立150周年に向けて、さらなる前進の年に**

昨年のお阪・関西万博では、日本赤十字社の企画・運営した「**国際赤十字・赤新月運動館(赤十字パビリオン)**」に31万人を超える方が来館され、成功裏に閉幕を迎えました。ご来館の皆さまに「人間を救うのは、人間だ。」という理念を共有していただき、またSNSなどを通じて多くの共感と励ましをいただいたことに、心より感謝申し上げます。

2026年は、創立150周年を迎える2027年に向けた大切な年となります。「いのちと健康、尊厳を守る」という使命を胸に、**災害対応力の強化、気候変動への備え、国際人道法の理解促進などに力を注いでまいります。**

これからも、「苦しんでいる人を救いたい」という皆さまから託された思いを実現するため、赤十字は動き続けます。本年も、赤十字運動への力強いお支えを賜りますようお願い申し上げます。

## Vol.2 海外派遣の現場から

インドネシア編

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。赤十字の国際要員たちが見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。

インドネシアでは2025年11月・12月の大規模水害などで1000人近い方が犠牲になりました。日赤と国際赤十字は、救援活動に尽力し、現在も支援を継続中です。今後も、インドネシアの防災強化に注力します。

### 異文化もカロリーも全力で受け入れた、インドネシア派遣



リポーター  
矢島 有希 さん  
やじま ゆき

普段は都内の日赤病院で看護師をしています。昨年5月から8月まで、インドネシアに派遣され、「防災強化事業」の管理業務に従事しました。日本人スタッフは私一人で、現地スタッフのアワルさん、ヤナさんと3人でチームを組み、支援地域の村々を訪れました。実は初めての海外派遣でしたが、幼少期をマレーシアやシンガポールで過ごしたこともあり、「**再びアジアで暮らせること」「アジア料理が食べられること**」に胸を高鳴らせながらの出国でした。

現地での生活は自炊が基本、仕事終わりには近くのスーパー巡りをし、慣れない食材を前に「健康的な食生活が続けられるだろうか」と不安になることも。また、一人で食べるご飯に寂しさを感じて「料理は、ただ栄養を摂るだけではなく、誰かとおいしさを共有するものなんだ」と実感しました。

ひと月が過ぎた頃、支援地域を巡る16日間の出張が始まりました。途中からは空き家を宿泊地としてチームと共同生活に。朝5時から10人以上の朝食を作ったり、余ったお弁当をオムライスにリメイクしたり。料理を通じて「暮らし」と「関係性」が育っていく時間でした。

そして、私の心を奪った食材が「キャッサバ(熱帯原産の芋)」です。蒸しても揚げてもおいしく、お菓子にも変化する万能食材。粉にすればタピオカ、すりおろせばもちもちのお菓子に。また「lemet(ルメット)」は、キャッサバにブラウンシュガーとパームシュガー、ココナッツを混ぜ、バナナの葉で包んで蒸したものだ。あのもちもち感と香りが忘れられず、日本でも手に入らないか調べたほどです。

気づけば体重は3kg以上増え、日本に帰国する際に、看護師のユニフォームが入るだろうかと思いましたが、それ以上に、「**食べること」「作ること」「分かち合うこと**」というインドネシアの文化、あの国の優しさそのものを全身で吸収できたことに、幸せを感じています。



## TOPICS

青少年赤十字の  
国際交流

## 「小さな一歩が、世界を動かす」



開催中は10人ほどのグループに分かれ、テーマに沿ったディスカッションが行われた

国内外の青少年赤十字・赤新月メンバーが一堂に会し、「国際理解・親善」を深めることを目的に開催された「令和7年度青少年赤十字国際交流事業」。事業の中で10月30日から4泊5日で行われた今回の集会では、メインテーマ「Think globally, Act locally. (地球規模で考え、自分の地域から行動しよう)」のもと、世界で起きている課題に気づき、“自分ごと”として考え、次の行動につなげる力を育むことが掲げられました。参加者は日本各地と海外18カ国・地域から集まった73人。言語も文化も異なる仲間が同じ時間を過ごし、ディスカッションやフィールドワークなど、多彩なプログラムを通じて学び合いました。サブテーマには「人道危機」と「気候変動」を

設定。サブテーマに関するさまざまな国や地域の課題に向き合い、「自分の地域に戻ったとき、どんな行動ができるか」を考える時間が随所に盛り込まれています。知識を得るだけでなく、“仲間と出会い、自分の軸を見つける”。そんな濃密な5日間となりました。

象徴的な瞬間の一つは、参加者全員で歌った「Fight Song (ファイトソング) / Rachel Platten」。英語が母語でないメンバーも自然に口ずさみ、やがて会場は大きな合唱で満たされました。この歌を選んだ理由について、運営に携わった赤十字語学奉仕団のスタッフは「small boat (小舟) が big waves (大きな波) を起こすように single word (たった一言) で heart open (心を開く) するよう

に」と歌詞にあるように、それぞれが、それぞれの地でリーダーシップを発揮し、国際理解・親善とともに人道危機に立ち向かう。自分ならできると参加者の背中を押す応援歌になれば、と思いを語ります。

また、多くのプログラムは、約10人の小グループで進行。国際交流集会中の公用語は英語ですが、日本の参加者にとっては決して容易ではありません。その壁を低くし、初めて顔を合わせたメンバー同士が短期間で深く交流できるよう支えたのが、指導者(学校の先生)や赤十字語学奉仕団、ユースボランティアの存在でした。

参加者からは、「最高のメンバーでした。人生の宝物です!」という声や、「互いを理解しながら、世界を安全にする新しい方法を生み出している!」といったコメントも。国や言語が違っても、“苦しんでいる人の助けになりたい”という同じ思いでつながることができた、その実感が、参加者の表情と言葉に表れていました。



4日目に行われた文化交流では、各国の民族衣装を身にまとう人も。国際色豊かな集会に

## けんけつのいま

支える命、つなぐ未来。vol.10

このコーナーでは、献血を推進するために各地で行われているさまざまな取り組みを紹介していきます。

Promoting  
Blood  
Donation

## 能登半島地震、発生。あのとき、現場では――

能登半島地震が発生した元日の夕方。石川県赤十字血液センターでは、正月の休暇を返上した職員たちが次々と集まり、血液供給を途切れさせないために関係機関との血液製剤の調整・連絡に追われました。同センター事業部長・作田和繁さんは次のように振り返ります。「会議中、頻繁に起こる余震のため緊急地震警報が繰り返し鳴り響き、異様な緊張感がありました。血液運搬に重要な道路がどういう状況か、献血ルームの損壊はどの程度か、他にも、津波への警戒があり、もし津波が発生したら到達する前に1階にある保管血液や機材を全員で2階に上げるぞ、などと話していました」。災害に対する日頃の備えが生き、無駄のないチーム力が発揮される一方で、作田さんには一つ、大きな気がかりが。「血液センターの職員

67人中66人の安否はすぐ確認できたものの、最後の一人と連絡が取れなかったのです。被害の大きい穴水に帰省中の看護師でした。気をもみながらも緊急対応に追われ、立ち止まる暇はありません。そんな中、ようやく連絡が! 携帯が使えず、避難所の固定電話から掛けてきた、その第一声は…『明日、献血ルームに出勤できません。ルームの被害は大丈夫でしたか?』。自身も被災しているのに献血のことを心配する――、赤十字の看護師だな、と呆れながらも胸を打たれました」。

作田さんは、この被災では胸が熱くなる場面が何度もあった、と話します。「1月2日から始まる献血は中止に。52人の予約者へ手分けして連絡すると、『大変な状況の中、わざわざご連絡くださって…頑張ってください!』と逆に励まされた

り、他県の血液センターの仲間から『人と物は用意した。いつでも駆けつけるから!』とエールが送られたり。こんなときこそ協力させてください、という声は県内だけでなく県外からも届きました。全ての皆さまに、心からの感謝を述べたいです」。



令和6年能登半島地震発生直後の道路状況。のと里山海道「越の原インターチェンジ」付近(2024年1月2日、日赤職員撮影)



Area News  
エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで  
日本赤十字社の活動は行われています。



## 若いボランティアたちの 宿泊研修「赤十字防災キャンプ」



全国の日赤支部では社会人・学生が組織する青年赤十字奉仕団(青奉)が活動しています。11月1日・2日、北海道・東北からなる日赤第1ブロックの青奉が岩手県支部に集まり、赤十字防災キャンプを実施。同支部に登録する災害救助犬の訓練見学の他、段ボールベッドを作って一晩寝たり、癒やしのハンドケアを学んだり、また、炊き出しでは岩手名物「ひつつみ\*」を皆で作り、交流を深めました。参加者からは「この学びを今後のボランティア活動に生かしたい」などの感想が聞かれました。

\*小麦粉をこねて薄く伸ばしたものを手でひきちぎって(ひつつむ)、野菜と一緒に煮込んだ鍋料理



## 福祉施設にもっと笑顔を！ 「福祉施設アイデアソン」初開催



11月22日、日本赤十字社総合福祉センターにて、子どもたちに福祉の仕事の魅力を伝えるイベント「福祉施設アイデアソン」が開催されました。アイデアソンとは「思考のマラソン」、短期集中でアイデアを出すワークショップのこと。参加した小学生は、福祉機器体験や特別養護老人ホームでの快適な生活のための工夫について説明を受け、入居者や職員へのインタビューも実施。プレゼンテーションでは、「入居者をもっと笑顔にするためには、交流が大切」という気づきから、みんなで楽しめるゲームのアイデアを発表しました。



## ラオス、バングラデシュから 赤十字の仲間が来日 青少年赤十字の国際交流



日赤京都府支部では、10月25日～30日、ラオス赤十字社の青少年赤十字メンバー2人を受け入れ、京都のメンバーとの交流を行いました。府内の青少年赤十字加盟校の訪問やウェルカムパーティー、献血ルームの見学の他、小学校訪問ではラオスの縄跳び遊びで大いに盛り上がり、交流を深めました。(①)



10月31日、岡山県支部は日赤バングラデシュ現地代表部の職員をJRC加盟園のこども園へ案内。園児たちにバングラデシュの文化などを紹介し、絵本やポーチ、ベンガル語の名札を贈呈。けん玉、あやとりなど日本の遊びや給食の時間を共にし、園児からは「明日も来て！」の声が。世界の多様性に触れる機会になりました。(②)



## 能登半島地震から2年 故郷を離れて学業に励む 「若き翼たち」の献血会



10月27日、「日本航空高等学校石川 東京都青梅キャンパス」で献血会が実施されました。同学園は1932年創立で、パイロットや整備士、航空に関する専門的な教育を行い、山梨、北海道の他に、能登空港に隣接したキャンパスがあります。しかし、2024年元日の能登半島地震により、能登空港キャンパスでの学業継続が困難に。同学園の生徒たちは、東京都青梅市の明星大学内に学業拠点の一部を移転。そして今年、能登空港キャンパスで2003年から2023年まで続いていた学校を挙げての献血が、遠く離れた東京の地で復活しました。当日は、生徒・学生155人が献血に参加し、笑顔あふれる献血会となりました。



## 働く車が子どもたちに大人気！ 「市民の日」イベントに 近隣病院と協力して出展



秦野赤十字病院は、共に救急医療を支える地域の医療施設との連携を深めています。11月3日、同院は国立病院機構「神奈川病院」と共同で第46回秦野市「市民の日」イベントに出展。2年連続で共に企画を考え、院長・副院長が、健康相談も担当しました。イベントでは、大人対象で血圧・血糖測定や血管年齢チェック、子ども向けに救急車乗車体験コーナーを設け、約280人の子どもたちが来場(日赤コーナーには約810人来場)。参加者から「救急車の体験ができ、赤十字の活動も知れてよかった」という感想が寄せられました。



## 大規模地震に備え、「救う」連携を強化 各地で災害救護、総合防災訓練



日赤埼玉県支部では、11月1日に深谷赤十字病院を会場に災害救護訓練を実施。県内外の赤十字病院(さいたま、小川、原町\*)から医療救護班が参集し、学生が傷病者役を務め赤十字ボランティアが炊き出しを行うなど約220人が訓練に参加しました。(①)

沖縄県では11月5日、那覇市主催の訓練に日赤災害救護研究所と沖縄県支部が協力。巨大地震と津波を想定した訓練はオンラインと実地の両方で行われ、LINEを活用した避難情報配信や、避難所でのQRコード確認など、新しい取り組みとなりました。(②)

香川県支部は11月8日、県内62団体で実

施する総合防災訓練に参加。赤十字の仮設診療所「dERU\*」を設営しDMATとも連携、レスキューサポートバイク赤十字奉仕団(医薬品輸送)や安全奉仕団(担架搬送)など、総勢70人の奉仕団が役割を確認しました。(③)

静岡県支部では11月15日に伊豆赤十字病院にて合同災害救護訓練を実施。県内の各赤十字病院の救護班や血液センター、奉仕団が参集し、伊豆市など他機関も参加。大規模地震を想定して、傷病者の受け入れ、血液搬送、通信訓練などを行いました。(④)

\*群馬県原町赤十字病院  
\*「国内型緊急対応ユニット」。仮設診療所設備とそれを運ぶトラック・自動昇降式コンテナなどの一式のこと

## 国内災害義援金 受け付け中

熊本、鹿児島などの台風・大雨災害、および11月に発生した大分市佐賀関の大規模火災の被災地の方々に支援する義援金を受け付け中です。

詳しくはこちら



## 今年で70回目の皇后陛下からの御下賜 日赤の全国10施設に600本が届く

日赤名誉総裁である皇后陛下雅子さまから、日本手拭い600本が下賜されました。手拭いは、皇后陛下のお誕生日である12月9日に合わせて賜ったもので、日赤が運営する介護医療院や特別養護老人ホームなどの入所者に配られました。この御下賜は、昭和24年に香淳皇后が始められて今年で70回目。ゆずのデザインも、皇后陛下自らが選ばれました。



## お客様1人につき1円を寄付する 基金設立から10年



「ゆで太郎」各店舗に貼られている夢基金ステッカー

「おいしいお蕎麦をできるだけ安く気軽に、皆様の健康に役立てれば」と、丁寧に挽いた蕎麦粉を使い、各店舗の製麺機で毎日製麺、打ち立て・ゆでたての蕎麦を提供している「ゆで太郎」。同社では、店舗に来店したお客様1人につき1円を日赤の活動資金として寄付する「ゆで太郎夢基金」を設立し、今年で10年を迎えました。設立時、東日本大震災被災地への寄付などを行うなかで「一過性で終わらせるのではなく、継続的な取り組みとして寄付を企業の文化として根付かせたい」との思いから同基金をスタート。これまでの寄付総額は、1億9000万円にも上り(2025年11月時点)、日赤の防災の啓発活動、災害救護、社会福祉活動など、幅広い分野の支援に役立てられています。また、より良い社会に寄与する熱い思いから、寄付活動だけでなく、国際貢献として「ミャンマー奨学生制度」(優秀なミャンマーの若者を日本へ招き、日本語学校の学費や生活費、寮などを支援し、働きながら学ぶ機会を提供)も行っています。



ゆで太郎特撰 水出しそば茶  
(5袋入り×8パック)  
ティーバッグ1袋で1リットルのそば茶が作れます。「ゆで太郎オンラインショップ」でも好評販売中

昨年のミャンマー奨学生は4月に10人、10月に13人。10月は10人の予定で選考したものの、その優秀さと熟慮が審査員の心を動かし、13人となった



## 赤十字NEWSオンライン版はコチラ

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください！



プレゼント希望者は右の二次元コードからご応募ください。

応募締め切り：1月30日(金)

\*当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます



ご応募は  
こちらから





### トルコってどんなところ？

東ヨーロッパと西アジアにまたがる国で、国土面積は約78万km<sup>2</sup>と日本の2倍以上。歴史的にも多くの文明が交差してきた場所であることから、「アジアとヨーロッパの架け橋」とも呼ばれる。イスタンブール歴史地域やカッパドキアの岩石遺跡群など、数多くの世界遺産を有する観光大国でもある。

## トルコ・シリア地震 再生の道を一歩ずつ。新「献血ルーム」も完成

2023年2月に発生したトルコ・シリア地震以降、日赤はトルコ赤新月社(以下、トルコ赤)と協定を結び、「地域保健活動」、「給水・衛生支援」、「血液センター新規移転」などの資金援助を行ってきました。今回は、これらの支援状況をレポートするとともに、現地で活動するトルコ赤職員や、支援を受けた方々の声も届けます。

### 仮設住宅から公営住宅へ 移住が進んでも残る 健康的に暮らすための課題

トルコ・シリア地震発生から間もなく3年。現在、トルコ南東部の被災地域では災害公営住宅の建設が進んでいます。2025年2月には約60万人がコンテナ型仮設住宅で避難生活を送っていましたが、今ではその大半が、この公営住宅へ移住しています。

トルコ赤では、これまで**仮設住宅が集中するエリアに「コミュニティサービスセンター(CSC)」を設置し、避難生活を送る人々の健康を守る活動や「こころのケア」などを提供してきました**。その中で日赤は地域保健活動を資金面で支援し、救急法や感染症予防、運動習慣の推進といった啓発活動を後押ししてきました。トルコ赤のアイシェヌールさんは、自身も仮設住宅で避難生活を送りながら避難民支援の活動に従事し、これまでの変化を次のように振り返ります。

「CSCの開始当初、特に女性特有の健康問題については、同じ女性間であっても口に出すのをためらう空気がありました。しかし、彼女たちの声に耳を傾け続け、正しい知識を伝えることで、徐々に信頼関係が深まり、心を開いてもらえるようになりました」

公営住宅への入居が進んだことを受けて6県8カ所に設置されていたCSCも役目を終え、2025年末をもって活動を終了。アイシェヌールさんは「公営住宅に移ったとしても、人々の健康に関する不安は消えること

はありません。乳がんなどの女性の健康に関わるセミナーは参加者も多く、CSCの閉鎖を残念がる声も多く聞きます。人々の要望に耳を傾けつつ、私たちの支援も次の段階に進みます」と、語りました。

### 日赤の支援により 新しい献血ルーム完成 さらなるレジリエンス強化へ

トルコ赤は、政府からの指定を受けて国内の血液製剤供給を管理し、日赤と同様に血液センターや献血ルームの運営を行っています。2023年の大地震により、いくつかの血液センターや献血ルームも損害を受けました。アドウヤマン県も大きな被害を受けた地域の一つですが、日赤の資金援助を受け、献血ルームを建て直し、献血バスも新たに配備。また、**同県内の血液センターはこの資金援助により移転して、新しい設備を備えた最新の血液センターに生まれ変わるようになりました**。

日赤支援の新しい献血ルームを訪れたアブドゥルカデシュさんは、こう話します。

「トルコ赤から携帯電話にショートメッセージが届き、仕事の合間に献血に来ました。この献血ルームのように新しい建物が増えて、ゆっくりとですが、復興が進んでいるのを感じます」

また、常連の献血協力者であるマフムットさんは、「これまでも日本はさまざまな支援をしてくれ、日本を好ましく感じていましたが、改めて、新しくてきれいな献血ルームの設置を支援してくれたことに感謝します!」

この献血ルームで採血する看護師のハティージェさんは、元々アドウヤマン県に

あった血液センターに勤務していたものの、震災後の一時閉鎖に伴い別の県に移住。今回、新献血ルームが完成したことでアドウヤマン県に戻ってきました。

「町は震災前の状態には程遠いですが、新しい献血ルームをととても気に入っています。人の命を救う過程の一部である献血に従事できることを誇りに思います」(ハティージェさん)

献血ルームでお話を聞いた誰もが、復興への期待と献血事業の再建への喜びを語りました。

地震後しばらくの間、献血者数は地震発生前の20%程度にまで落ち込んだ時期もありました。深刻な被害を受けた被災地の範囲が広く、国全体の復興に時間がかかっていますが、献血者数も、およそ70%程度にまで戻りつつあります。トルコでも「献血は無償のボランティア行為」です。トルコ赤はSNSでの発信や携帯電話へのショートメッセージを通して献血協力を呼びかけている他、未来の献血者を育てる目的で、学校などを訪問して献血の意義を伝えたり、献血関連のグッズを配布したりと、献血の啓発に力を入れています。

最後に、献血ルームのスタッフから日本の献血者に向けて、次のメッセージが贈られました。

**「住む場所は違っても、献血を通して誰かを救いたいと行動を起こす人がたくさんいることは、とてもすてきなことです。ぜひこれからも献血にご協力ください!」**

日赤によるトルコへの支援は、これからも続いていきます。



日赤の支援で完成したアドウヤマン県の献血ルーム



血圧測定中のアブドゥルカデシュさんとハティージェさん



CSCでは栄養バランス改善のためのワークショップも